

日本ミルトン協会第9回研究大会  
研究発表及びシンポジウム資料

於：青山学院大学青山キャンパス

日時：2018年12月1日(土)

# 日本ミルトン協会第9回研究大会プログラム

日時 2018年12月1日(土) 12時45分より[12時15分受付開始]

場所 青山学院大学青山キャンパス2号館236教室

○委員会 (11:30~12:45) 2号館234教室

○開会の辞 (12:45~12:50) 会長 西川 健誠

○研究発表 (1. 12:50~13:30 / 2. 13:35~14:15 / 3. 14:20-15:00)

司会 1・2 川島伸博 3 圓月勝博

1. *Paradise Lost* へのバロック芸術の影響をめぐって

——内面的靈性のバロック的描写による啓発—— 岡田 善明

2. 刻み込まれた古典：ジョン・バスカヴィルの『パラダイス・ロスト』について 渡辺 賢一郎

3. ミルトンと異端狩人 川崎 和基

○休憩 (15:00~15:15)

○シンポジウム (15:15~17:30)

ミルトンと神——「正しき神の摂理」をめぐって——

オーガナイザー 江藤 あさじ

1. イングランド宗教改革と反カトリック 山本 信太郎

2. *Paradise Lost* の神学——16-17世紀の予定説—— 富樫 剛

3. 救われないものたちはどこへ辿り着くのか  
——*Paradise Lost* における神の創造と Death の行方—— 江藤 あさじ

○総会 (17:30~18:00) 司会 西川 健誠

活動報告 笹川 渉

会計報告および予算審議 金崎 八重

会計監査報告 江藤 あさじ・倉恒 澄子

来年度大会・研究会予定

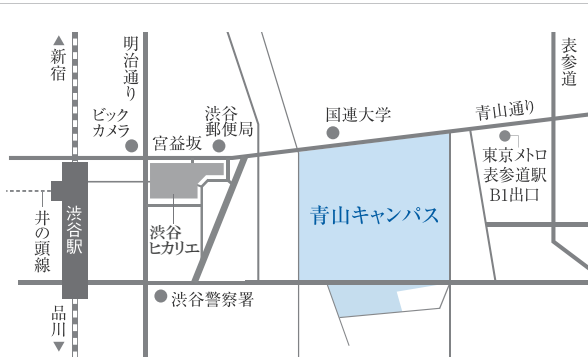
その他

○閉会の辞 (17:55~18:00) 西川 健誠

○ 懇親会 (18:15~20:15)

於：青山学院大学キャンパス内 アイビーホール「filia (フィリア)」

JR 山手線、JR 埼京線、東急線、京王井の頭線、東京メトロ副都心線 他「渋谷駅」より徒歩 10 分 東京メトロ (銀座線・千代田線・半蔵門線)「表参道駅」より徒歩 5 分



## 青山キャンパス



1 号館 1 階にセブンイレブンがあります。

17 号館 1 階と 7 号館地下に学食があります。

研究発表 1 :

*Paradise Lost* へのバロック芸術の影響をめぐって

—内面的靈性のバロック的描写による啓発—

岡田 善明（日本大学兼任講師）

越智文雄は『ミルトン研究』（1953）で、イタリア人の血を受けている友人の Charles Diodati から影響を受け、ジョン・ミルトン（John Milton 1608–1674）はラテン語やイタリア語の詩を書き、またイタリアと古代ローマを憧れたことを書いている。Diodati の影響もあり、ミルトンがイタリアの旅に出たのは 1638 年から 1639 年にかけてで、満 29 歳のときである。フィレンツェ、シエナ、ローマ、ナポリと半島を南下し、ローマに戻り、再びフィレンツェに入って、最後にヴェネツィアに滞在し、1639 年盛夏頃帰国した（ミルトン『第二弁護論』（*Defensio Secunda*, 1654））。

そしてイタリア旅行 3 年後に書かれた『教会統治の理由』（*The Reason of Church Government*, 1642）は、プロテスタント信仰を英国教会にもたらすのにどのような組織が理想であるかを書いた著作であるが、その中で、「わたしは彼らイタリアの方がた、母国の何人かの友人たちに、そしてなににも増して、いまや日々わが心にきざす内的な衝動にたきつけられて、努力と研究—それこそわが生涯のつとめと自覚している—をつんで将来の強い性質を研ぎ、簡単に死に絶えないような作品を後世のために書き残したきものと思うようになりました」と述べ、詩人は偉大なる国民の美德とよき自覚を培い、神が高き摂理から教会に生起することをほめたたえるという心の内面的な靈性を教会組織の中でどのように教化するかを書いている。当時の主教制度批判として書いた『教会統治の理由』の中で、将来の *Paradise Lost*（1667）執筆につながる詩人の役割と自らの使命を書いている。

ミルトンがイタリアを旅行した時代はバロック文化の時代であるが、『バロック美術の成立』（2003）で宮下規久朗は、バロック芸術の特徴を「写実的でありながら精神的な美術という矛盾を抱えていた」そして「その靈的特性を失わずにリアリティをもって表現することこそバロックの追及したものである」と述べているが、ミルトンがプロテスタントの精神性や靈性をバロック芸術として *Paradise Lost* に描いたと言えよう。

本発表において、ミルトンが *Paradise Lost* の世界をまるでイタリアのバロックの建築や絵画のようにリアリティをもって描写し、更に未来の情景をミカエルがアダムとエヴァにバロック絵画の特徴の二重ビジョンのように見せる等、ミルトンがバロック芸術を参考にしながら『教会統治の理由』に書いた清教徒としての内面の信仰を *Paradise Lost* にバロック的建物や絵画のように具現していることに論及し、本作品の創作の意図を探りたい。

## 研究発表 2 :

刻み込まれた古典：ジョン・バスカヴィルの『パラダイス・ロスト』について

渡辺 賢一郎（明治大学非常勤講師）

この発表は、ジョン・バスカヴィル（1706–1775）がミルトンの『パラダイス・ロスト』をどのように古典として印刷したか、タイポグラフィの分析を行い考察する。

バスカヴィルは、ウエルギリウスの著作集をはじめ、聖書や共通祈祷書、ミルトンの『パラダイス・ロスト』などを印刷・発行した。その活字は高く評価され、現在までバスカヴィルの活字をモデルにしたデジタルフォントが使用されている。

バスカヴィルの『パラダイス・ロスト』は評価が高くない。フィリップ・ギヤスケルはバスカヴィルの書誌を編纂した際、その書籍を「格段に美しいが高価で不正確」と評した。「不正確」であるから本文としての価値がなく、また「美しい」というのは、おそらく聖書や共通祈祷書のようなパラテキストを用いた書籍に関してであり、それを用いていない『パラダイス・ロスト』に関してではない。むしろ同時代の評価は、バスカヴィルの書籍は版面が白く読みづらい、というものだった。バスカヴィルの『パラダイス・ロスト』は本文に関してもタイポグラフィに関しても見るべきところがないということになるが、はたしてそうだろうか。

この発表はバスカヴィルの『パラダイス・ロスト』のタイポグラフィを再考する。注目するのは、バスカヴィルのイタリック体とスペースの使用法である。

現在、イタリック体はローマン体に従属する書体として使用されているが、イタリック体を初めて作成したアルドゥス・マヌティウスは単独に本文用活字として用いた。バスカヴィルの時代にすでにイタリック体は従属書体になりつつあったが、バスカヴィルはそれを単独の書体として用いている。このことは古典への回帰を意味するだろう。

また、バスカヴィルの『パラダイス・ロスト』は、文字と文字の間、また語と語の間のスペースが広い。これはバスカヴィルの作成した活字のカウンター（活字内部の空白部分）の広さに由来する。活字のカウンターの広さにあわせて文字間のスペース、さらに語間のスペースが広がるため、バスカヴィルの組版は全体としてスペースが広がる。これが、ジョセフ・モクソンがいうように、雄大な雰囲気を作り出すことになるのである。

以上の点に工夫を加えてバスカヴィルはミルトンの『パラダイス・ロスト』を古典として印刷したのではないだろうか。

### 研究発表 3 :

#### ミルトンと異端狩人

川崎 和基（日本大学）

1641年の長期議会による星室庁の廃止は、事前検閲制度の機能の低下を招き、星室庁に代わり議会による事前検閲が行われるものの、様々な政治的、宗教的思想が込められた出版物が急増することになる。この出版物の急増は、これまで事前検閲制度により抑制されていた思想が出版物という形で噴出したことを物語っている。

長老派の聖職者であったトマス・エドワーズ（1599–1647）は、この急進的思想が込められた出版物の噴出に直面した一人である。エドワーズは、この状況に危機感を覚え、異端狩人となり1646年に *Gangraena* を出版した。*Gangraena* には、再洗礼派、反律法主義、アルミニウス主義などといった彼が主張する異端思想に対する攻撃ばかりか、実名を挙げてのその思想の信奉者への攻撃を見ることができる。エドワーズが攻撃する異端思想の数は、およそ300にもおよび、さらに実名を挙げて糾弾する数は138人になった。こ

の出版物による攻防はパンフレットウォーとなり、エドワーズが仕掛けた戦争は、138人を相手とする大規模なものとなった。

エドワーズの異端視する者に対する攻撃の最大の理由は、彼らが、宗教的寛容の名の下で誤謬を犯していると考えていたからであった。彼はすべての異端者を、宗教的寛容の乱用者と認識し、特にジョン・グッドウィン（1594-1655）、ウィリアム・ウォルウィン（1600-81）、ジョン・リルバーン（1614-57）らをもその乱用者として攻撃した。ジョン・ミルトン（1608-74）も彼らと共に攻撃の対象となり、その攻撃は、ハーバート・パーマー（1601-47）ほどの激しさではないが、1643年に出版された *The Doctrine and Discipline of Divorce* に対して行われた。エドワーズにとってミルトンは、宗教的寛容を乱用する異端思想を持った人物に映ったが、それは同時に彼が長老派にとっても異端視されていたことを示唆している。

本発表では、宗教的寛容を巡って、エドワーズが行う異端狩りにどのようにミルトンが抵抗し、反撃を行ったのかを再考し、さらに1640年代の内乱期パンフレットウォーの一端を垣間見てみたい。

## ミルトンと神

### ——「正しき神の摂理」をめぐる——

講師：山本信太郎（神奈川大学）

富樫剛（フェリス女学院大学）

江藤あさじ（同志社女子大学他嘱託講師、司会）

「ミルトンと神」というあまりにも壮大なテーマを掲げたことに臆する反面、ここを避けては、ミルトンのいかなる作品をも論ずることは難しいはずだという思いがある。ミルトンは、その生涯において多岐に渡る様々なものを吸収し、そして独自の神学理論を築き上げた。またそのプロセスでは、必ずしも終始一貫しているということはなく、常に変化が見られる。それが時には矛盾していようとも、ミルトンは自分が信じた道を柔軟に修正しながら突き進む。これは、恐るべき量の学識を次々と身につけ、最後には「最高の知恵」(12.575-76)を得たことで神の声を正しく解釈できるようになったということなのか。晩年ミルトンは、自身の神学理論を完成させたと信じたのだろう。*Paradise Lost*の執筆の目的を“I may assert Eternal Providence, /And justify the ways of God to men.”(1. 25-6)と、宣言した。果たしてミルトンはどの様にして、そしてなぜ神の摂理の正しきを証ししようと心に決めたのか。

ミルトンの神学理論については、実に多様な人々から影響を受けていることを、これまでも多くの学者が論じてきた。さらにそこへ、宗教改革や政治的動乱の波が加わった。その中でミルトンは、神が創造したこの世の中にある英国を良くすることをひたすら願った。人に認められることもあれば、痛烈に批判されることも、また処刑リストに載りながら友人たちに救われるという経験もした。そういった諸要素・諸条件が融合したことで、ミルトンの*Paradise Lost*に描き出される創造、墮落、そして救済観は独自性を帯び、完全にどこかの派や誰かの理論に属していると言い切れなくなっている。それゆえ我々は、今なおその複雑さを完全には解明できないでいる。ただし、だからこそ、ミルトンの神学的立場を決定づけようとするとき、我々は尽きない議論に興じることができるのだ。本日のシンポジウムがまさにそのような議論の場になれば、と思う。



## イングランド宗教改革と反カトリック

山本 信太郎（神奈川大学）

ミルトンが終生抱いた反カトリック感情は、周知の通り、17世紀のイングランドに生きる人々にとって広く共有されていた。もちろん、イングランドはヘンリ8世の離婚問題を通して、1530年代にイングランド国教会を成立させ、ローマ教皇を頂点とする西ヨーロッパ・カトリック世界から離脱し、プロテスタント国家への道を歩み出した。しかし、国教会成立後しばらくの間、プロテスタントとしてのアイデンティティや、カトリック教徒を同じ神を信仰する者とはみなさないほどの反カトリック意識は、少なくともイングランドの普通の人々には無縁であったと考えられる。本報告は、16世紀前半からのイングランド宗教改革の過程を跡付け、イングランド宗教改革と反カトリック意識の関係を改めて考えてみたい。

まず、イングランド宗教改革における教区レベルでの人々の対応を、研究史も押さえながら跡付ける。特にヘンリ8世の死後、エドワード6世のプロテスタント改革、メアリ1世のカトリック復帰、エリザベス1世による国教会の確立という激動のミッド・テューダー期を、普通の人々がどのように受け止め、プロテスタントとカトリックということをどのように捉えたかを検討する。次に、16世紀後半から17世紀にかけて、いかにして「外敵としてのカトリック」という意識が形成されたかを、それまでの宗教改革の過程と関わらせながら考える。最後に、国教会成立とまさに並行してイングランド王国と一体化したウェールズを取り上げ、イングランド宗教改革が順調に受容された側面と、伝統宗教の残存やカトリックのリヴァイヴアルがあった側面の両方を検討し、「内なるカトリック」についても考察してみたい。

*Paradise Lost* の神学 ——16-17 世紀の予定説——

富樫 剛 (フェリス女学院大学)

Maurice Kelley, “The Theological Dogma of *Paradise Lost*, III, 173-202” (1937) および *This Great Argument* (1941) において、Alastair Fowler による Longman 版 *PL* の脚注において、新旧の *Milton Encyclopedia* (1978-83, 2012) において、Danielson, *Milton’s Good God* (1982) において、そして Stephen Fallon, “Elect above the Rest” (in Dobranski and Rumrich, eds., *Milton and Heresy*, 1998) において、*PL* の神学は Arminius 派のそれとされている。Milton 研究 80 年来のこの定説に対して本論は疑義を投げかける——本当か？——*PL* の神学は本当に Arminius らに依拠するものといえるのか？

こう問うにあたり、本論では 16-17 世紀イギリスにおける予定説がどのようなものであったかを精査する。とりあげる——予定である——のは Jean Calvin, Theodore Beza, William Perkins, Jacobus Arminius らの神学書、George Gifford, Arthur Dent らの大衆向けの宗教書、Hampton Court 会議・Dort 公会議・Westminster 宗教会議関係の諸文書である。これらを精査することにより、「Calvin 派の予定説 vs. Arminius 派の自由意志」などというあまりにも単純な対立以上の宗教的・社会的背景が *PL* にあることを示したい。同時に、第 3 巻の天国における対話の場面のみならず、第 11-12 巻における Adam の教育の真の意義を明らかにしたい。

さしあたり次の引用でこの要旨を閉じる。これは誰の、どこからの、言葉であろうか？

神は人を男と女につくり、理性と不死の魂、知識と正しく真に清らかな心を与えた。人の姿は神の姿と同じであり、またその心には神の法が書きこまれていた。人には、この法に従って生きる力と同時に、この法から逸れる力が与えられた。これは自分たちの意思・意志の自由に、変化する心に、任されたのである。

救われないものたちはどこへ辿り着くのか  
——*Paradise Lost*における神の創造と *Death* の行方——

江藤 あさじ (同志社女子大学他嘱託講師)

*Paradise Lost*におけるミルトンの創造、墮落、救済観に聖アウグスティヌスの神学からの影響がかなりみられるということについては、Peter Fiore が *Milton and Augustine* (1927)において詳細に述べているところである。その聖アウグスティヌスは、自身がマニ教からの善悪二元論の影響を強く受けてしまったことで、その二元論を否定するために「無からの創造説」(ex nihilo)を苦しみながら生み出した。しかしミルトンは、いとも簡単に(ではないのだろうが)その説を覆してしまう。ミルトンは *Paradise Lost*において創造から救済、そしておそらくはその後に至るまでの神と人を含む被造物全てとの関わりを、当時広く流布していた「無からの創造説」ではなく、むしろ異端視される危険性の非常に高い「物質からの創造説」で描ききっているのだ。

発表者はこれまで、ミルトンが支持した物質創始説が、神を中心として万物が共生する様をいかに合理的に説明できているかに焦点をあてて研究をしてきたが、最後の *Death* の行方だけがなかなか合理的に解釈することができないでいた。*Death* は、自らが呑み込んでいったあらゆる最下層にある澱や屑を二度と吐き出すことがないよう、その口を堅くとじられてしまう。そしてその存在がそれからどのようなようになるのかは *Paradise Lost* には述べられていない。さらに、いずれは自らの贖罪によって許されることとなる悪しき罪びとたちが彷徨う場所(と多くのカトリック教徒などが信じていた) *Limbo* も、*Paradise Lost* では“final dissolution”(3.458)まで、そのままの状態であるようだ。聖アウグスティヌス的に解釈すれば、救われない者たちは、その時点で無化しており、もはや非存在となっている。ミルトンはどうなのか。今回のシンポジウムでは、主にその点について明らかにしてみたいと考えている。